空間・社会・地理思想 11号, 2-18頁, 2007年
Space, Society and Geographical Thought

英国海軍情報部作成の Geographical Handbook Series に関する一考察 ―*China Proper* を中心に―

源 昌久 *

The Geographical Handbook Series Edited by the British Naval Intelligece Division: A Study with Focus on *China Proper*

Ⅰ 序

地理学（この用語をよりおおまかに使用するならば）は軍事戦略を問題にしなければならないと思われる。現在まで常にそのようであったように，そして将来においても多分，何時でもそのようであろう。
― グールド Peter Gould(Gould 1985:161-162)

筆者は日本の軍事と地理学との関係について既に発表を行ってきている [1)]。今回，英国における軍事と地理学との結びつきについて言及し，この分野の基礎的な研究素材を提供しようとする試みである。第二次世界大戦（1939 年-1945 年）中，英国では陸・海軍共に地図ないし地誌情報を取り扱う部局をいくつも有していた。例えば，陸軍関係部局のひとつとして，Geographical Section of the General Staff (GSGS, MI4 とも呼称されている。訳語として久武は「参謀本部地理課」を当てる（久武 2005：6））が設置されている。本機関は GSGS Series の地図を発行していることなどで日本においても知られている。本稿では，英国海軍の諜報機関である英国海軍情報部 the Naval Intelligence Division（後述）の一セクションである NID5（Geographical Handbook）（後述）に限定し，ここで編集された Geographical Handbook Series(以下，GHS と略す)（後述）を取り上げ，地理学史上における NID5・GHS の意義の検討を試みる。NID5 と英国地理学者とはどのような関係があったのか，さらになぜ海軍が GHS（地誌）を作成する必要があったのかについて調査してみたい。Ⅴにおいて，GHS のうち，中国を記述対象地域とした *China Proper*（1944-1945, 3vols）を 選び，詳細に内容を分析し，兵要地誌との関連をも考察したい。

第二次世界大戦時に地理学者が戦争（軍）にかかわった記録は，日本の戦後の世情とは異なるが，英国においても国家機密として戦後 30 年以上も公にされていなかった。George Bishop が指摘するように，Harry Hinsley が公的歴史記録として，*British Intelligence in the Second World War*（1979-1984 3v in 4）を刊行し，英国諜報サーヴィスの機密が解除されるようになってからである（Balchin 1987:159)。通称「30 年法」（The Public Records Act）によって，政府資料は作成後，30 年間を経過すると公開される。このような状況下にもかかわらず，ロンドンにあった米国の戦略サーヴィス局（OSS:Office of Strategic Service）に勤務していた米国人 Leonard S. Wilson が 1946 年に英国における戦時中の地理学の活動内容を論文“Some

* 淑徳大学総合福祉学部

Observations on Wartime Geography in England”にまとめ発表した。フリーマン Thomas Walter Freeman（1908-1988）は，「戦時下の活動は内密にすることが習慣であった」とのべているのだが（Freeman 1980: 142-143）。1987 年，W. G. V. Balchin は論文“United Kingdom Geographers in the Second World War”を記した。

上記 2 点の論文中において GHS および NID5 とそれらの関連部局が取り上げられている。2003 年，Hugh Clout and Cyril Gosme の共著論文“The Naval Intelligence Handbooks : A Monument in Geographical Writing”が発表された。本論文は，GHS を中心テーマに据えた学術論文である。ここにおいて著者らは GHS を「世界地誌」としてとらえ，評価をあたえている。

上記以外, GHS およびそれに関連した人々についての記述は，地理学者の伝記および大学の地理学部の歴史に関する文章中に散発的に見出す程度であった。このような状況下であったが，データを可能な範囲内でクロス・チックし，正確性を高めた。筆者は，原資料（0 次資料）の重要性と関係資料の不足をかんがみ，2005 年 7 月から 9 月にかけて，英国図書館 the British Library およびオックスフォード大学アーカイヴズ Oxford University Archives を訪問し，資料の検索・複写を行った。入手した資料の内には現在までに地理学史研究上において発表されていないと思われる 0 次資料も存在した。しかし，英国地理学協会 the Royal Geographical Society（RGS）のアーカイヴズへ関係資料（NID5File）について手紙にて問い合わせを行ったが回答を得られなかった。地理学者等のマニュスクリプトについて閲覧を希望し，the National Archives へオンラインあるいは郵便にて連絡をとる計画を現在，考慮中である。未入手の資料を含め，今後の課題として，アーカイヴズへの積極的なコンタクトを行い，さらに本研究を進めていきたい。

GHS は，名称に「ハンドブック」という語が記載されているために，読者・利用者に誤解をあたえ，検索上においても不都合を生じた可能性があったのではなかろうか（Williams 1995 :295）。*Harrod's Librarians'*...によれば，「（ハンドブックとは）ある特定主題についての図書。今日，しばしばシンプルであるが啓蒙的であり簡便な情報を含み，手中に入る位のサイズである。...また，マニュアルとも呼称されている」 と定義されている（Prytherch 2005:317）。『図書館情報学用語辞典』（第 2 版）によれば，（巻末索引）「handbook 便覧」と記載され，「（便覧 handbook とは） 特定領域の知識をまとめ，実務的な利用を目的として解説したレファレンスブック」と記されている（日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 2002：218）。これらの解説から，「ハンドブック」は特定主題をコンパクトにまとめた二次資料のように見受けられる。しかし，GHS は前記のような性格の書物ではない。後に検討を加える語句であるが，Freeman は「全体として，GHS は 1930 年代の内容を含む一種の世界地理であった」とのべているように(Freeman 1980:143)，GHS は地誌そのもの（一次資料）である。Clout and Gosme は「戦時中の応用地理学」，「地域研究」などのキーワードを GHS の性格に付与している(Clout and Gosme 2003 :153)。

現在，日本において世界地誌としての主要なシリーズ（原則として 1945 年以前に刊行）として知られている叢書を文献リストなどで探索してみよう。教職用の教科書を指向している藤岡（他）共著『世界地誌』の付録に掲載されている「外国地誌主要文献」の（1）世界全般・叢書類中，該当期間に 7 点（戦後に新改訂版が刊行されたものを含む）が記載されている（藤岡（他） 1973:273-281）。ここには GHS のシリーズ名は収載されていない。「総合性の高い辞典」（山本（他） 1997:305）として評価されている『地理学辞典』（改訂版）の「世界地誌」の項目に，「学術水準が高く世界的に有名な世界地誌書としては, 古くは Ritter,C. の「Die Erdkunde」全 19 巻（1822～1859）があり，第 2 次世界大戦前には，Vidal de la Blache, P.と Gallois,L. との監修になるフランス学派の「Géographie Universelle」全 15 巻がある。単行本としてはいくつもあるが, James,P. E. の「An Outline of Geography」が有名である」との記載があり（日本地誌研究所 1989:362），GHS はここでも触れられていない。管見の限りでは，日本で刊行された地理学書中に GHS の叢書名を見出すことはできなかった。なお，Clout and Gosme は 40，50 年位前まで，GHS がよくしられていたが，

今日，地域研究書としての存在価値が忘れ去られたと記している(Clout and Gosme 2003 :154)。このような状況下で，日本において本シリーズの価値を認知させることは本稿のひとつの意義であろう。

本稿を執筆するに際し，筆者は文章記述上，つぎの点に留意した。

原則として，国名等の地名呼称は当時の名を使用した。ただし，「中国」に関しては，（支那は）「わが国では江戸中期から次第に広まり，第二次世界大戦末まで用いられた」（日本国語大辞典第二判編集委員会小学館国顔辞典編集部 2001 : 901）と記されているように，「支那」の語が戦前の地理学の学術書中で多数，使用されていた。本稿ではできる限り，「中国」，地域によっては「満洲」などの呼称を用いた。“Intelligence”の訳語は，統一して「情報」あるいは「諜報」とするのではなく，文脈によって使い分けた。

Ⅱ　英国海軍情報部の成立ならびに GHS の前史

1. 英国海軍情報部の成立

GHS を検討する前に，その前身である Geographical Handbooks (Admiralty)（以下，AGH と略す）・manuals の編集母体である英国海軍情報部の成立について述べてみたい。はじめに，海軍との関連上，背景および陸軍について，簡単に記す。

19 世紀後半，ヨーロッパの国々，とりわけ英国は産業革命以後，「世界の工場」として自国の活路を確保することがより一層，重要課題となってきた。したがって，他国との衝突も避けられない情勢であった。

衝突の第一は，クリミア戦争（1853 年-1856 年）であった。英国，フランスおよびオスマン帝国の連合軍と単独のロシアとの戦いの結果は，連合軍側の勝利に終わった。この戦役の開始時点で英国はクリミアやオスマン帝国に関する基本的な地図すら所持していない状況であった。このことが起因となり 1885 年に地形・統計局 Topographical and Statistical Department の新設へとつながった。さらに，次述の普仏戦争（1870 年-1871 年）とも関連し，1873 年には地形・統計局は発展的に解消し陸軍省 the War Office 内に初の情報部 the Intelligence Branch (IB) を設置した（北岡　2002 : 30）（Hinsley 1979: 7）。

第二の衝突は，普仏戦争があげられる。この衝突においてドイツ軍の連戦連勝と言うめざましい勝因のひとつが軍備内における強大かつ影響力を有する情報（諜報）システムにあったことが判明した。この事実と国際間の緊張感により，英国は前述のように情報部（IB）を新設するに至った。1887 年，本組織は拡大され Director of Military Intelligence（DMI）のポストを創設した（Hinsley 1979 : 7)。

第三の衝突は，第二次ボーア戦争（1899 年-1902 年）があげられる。トレヴェリアンが，「ボーア人農民の意気軒昂たるゲリラ的抵抗による戦争の長期化もあって，...」と記しているよう（トレヴェリアン 1975 : 161-162）に，戦いはゲリラ戦化した。ゲリラ戦を克服するには敵側の詳細な地理情報や的確な情勢判断を必要とした。ここでは情報の収集，分析よりも情報の使用法 (use) の失策に多くの敗因が見られた。英国は戦争には勝ったが，情報戦では失敗であった。このことは情報体制の適切な改革への原動力となった（Andrew　1985: 28-29)。この動向が後述する機密サーヴィス局　the Secret Service Bureau の創設へつながる。

海軍における情報（諜報）組織の動向を前述と関連しながら述べてみる。陸軍の IB 設置後も自らの情報部を創設する動きはなかった (北岡　2002 : 30)。

露土戦争（1877 年-1878 年）後，英国海軍は，ロシアとフランスの海軍に対する警戒心から陸軍に遅れること 10 年，1883 年 [2]，John Colomb 大佐（後に，Sir）の助力により海軍司令部内に William Hall 大佐(1870-1943)の指揮下，海外情報（諜報）委員会 the Foreign Intelligence Committee（FIC）を設置した（北岡　2002 : 30）（Andrew　1985: 12-13)。

1887 年，DMI と同じく，Hall 大佐を初代の海軍情報部長官 Director of Naval Intelligence （DNI）として海外情報（諜報）委員会にとりこみ，英国海軍情報 the Naval Intelligence Department （NID）が設置された（Andrew　1985: 14)。

1909 年, 機密サーヴィス局が創設され, 1910 年, 局内の所掌分担がなされ，最終的に対外情報部を海軍，対内つまり国内情報部を陸軍が担当することに

なった（Andrew 1985: 58-59）（北岡 2002：34）。対外情報部の長にカミング海軍中佐 Commander Mansfield George Smith Cumming（1859-1923）(後に，Captain Sir)が就任した。筆者は，AGH，GHS 共に，なぜ陸軍ではなく海軍が編集を担当したのかと言う疑問を有していた。その答えのひとつがこの局内の所掌分担に由来するのではないかと推察する。

2. AGH の誕生

第一次世界大戦(1914 年-1918 年)の勃発。1915 年，英国海軍情報部(NID)内に地理課 a Geographical Section が創設された（Wilson 1946:603）。地理課は 1915 年から 4 ヵ年間で GHS の前身である AGH を刊行した。この経緯をフリーマンは，「英国地理学協会（RGS）およびその他の場所で主としてデクソン H. N. Dickson によって 1919 年 7 月までにハンドブックおよびマニュアル 50 種[3]が印刷に付された。1921 年にはそれらは一般向きに売られた」と述べている(Freeman 1980:103)。

AGH の特徴を列挙してみよう。

（a）本シリーズの各巻は，自然的特質や境界，気候，歴史，行政，住民，宗教，貿易と金融，衛生と社会状況，経済，動植物相，コミュニケーション，さらに地名辞典，用語集，地図，索引を付した包括的なパターンから構成されている。AGH は，陸軍や市民向けにも実用的情報を提供する百科事典のようなものであった（Freeman 1980:103）。第一次世界大戦直後には国際連盟においておおいに使用された（Naval Intelligence Division 1944:pref. iii[4]）。

(b)道路，鉄道，その他コミュニケーション（輸送機関）に関する記述が強調されている。コミュニケーション（輸送機関）の主題は，ある巻において総頁数の半分を占めているケースも見られた（Clout and Grosme 2003:154-155）。

(c)AGH の限界について。第二次世界大戦に密接に係わっている国，つまり，ドイツ，フランス，ポーランド，スペイン，ポルトガル等を AGH はカヴァーしていない。質的にふぞろいなものがある。地図，図，写真が十二分ではない（Naval Intelligence Division 1944:pref. iii）。

日本国内に何点かのハンドブックおよびマニュアルの所在を既に確かめているので，AGH に関する詳細な検討結果を後日，発表してみたい。

Ⅲ GHS および編集システム

1. 編集センターの設立の経緯

第二次世界大戦（1939 年-1945 年）の勃発により，英国はドイツを始めとする敵国および戦地についての地誌的情報の不足を痛感していた。例えば，ノルウェー南部におけるドイツ軍との交戦に際し，英国海軍のパイロットは，ドイツ軍を攻撃用に準備されたノルヴク Narvik（ノルウェ北部）の海図（つまり地形の外線を表現していない）しか所持していなかったと言われている（Balchin 1987:169）。

1939 年 6 月 16 日，新たに英国海軍情報部長官（DNI）に任命されたゴッドフレィ John Godfrey[5]（1888-1971)少将は，デベンナム Frank Debenham[6]（1883-1965）ケンブリッジ大学教授（1931 年，地理学部初代教授），ワーディ James M. Wordrie[7]（1889-1962）その他を訪問し，新しいハンドブック・シリーズの作成・編集を提案した。しかし，大蔵省は，この案を緊急事態と認めず，同意を与えなかった（Clout and Gosme 2003:156）（Balchin 1987:171）。

1940 年，ゴッドフレィ少将と補佐官であるフレミング Ian Fleming[8]（1908-1964）は，メーソン Kenneth Mason[9]（1887-1976）オックスフォード大学教授（1932-1953, 地理学部長 Head of Geography）に戦争を指揮する上で必要とおもわれる多数の地理学的レポートの作成を依頼した（Clout and Gosme 2003:156）。1940 年の終わり頃に，新たなハンドブック・シリーズを執筆する可能性が生じ，ケンブリッジ大学とオックスフォード大学双方に研究部門を設立しようとする提言が再び生じた。ゴッドフレィ少将は，オックスフォード大学およびケンブリッジ大学を訪れ，1940 年 12 月 12 日に海軍本部で開催された会議の席上で着手することがきめられた企画書とともに，（両大学の地誌的）共同作業の覚え書きに調印した（Clout and Gosme 2003:156）（Balchin 1987:171）。新セクションは NID5 として認可され，1941 年 1 月 15 日に大蔵省の承認を受け

た（Clout and Gosme 2003:156）。

ここで NID5 を理解する上で英国海軍情報部（NID）組織全体についてオックスフォード大学アーカイヴズ所蔵（GE20/3）の「NID の組織図」（1942 年 9 月時点）を参考にして概説しよう（Oxford University Archives 1942: GE20/3）。

英国海軍情報部は，調査および標準化された諜報（活動）を若干の例外もあるが国別のセクションで位置付けている。海軍情報部長官（ゴッドフレィ）の下に副長官（DDNI）が直属している。NID1 はドイツおよびドイツ占領地，スイス，スェーデン，フィンランド。NID2 はアメリカ他。NID3 はイタリア，トルコ，ギリシャ他。NID4 はインド，ビルマ他。NID5 はハンドブック。この課は文官の補助（役）（製図室，翻訳他）と関連している。NID6 は The Inter-Service Topographical Department (ISTD)で，全ての作戦に先んじて詳細な地理情報を準備する責務を負っている。NID7 は Constructional Engineering and Technical Matters。 NID8 は Operational Intelligence Centre。 NID 9 は W. T. (Wireless Telegraphy か)。 NID10 は暗号（表）。NID11 は写真図書館。NID12 は諜報要約。Hinsley によると 1 日に資料約 400 事項を要約したとの記事あり（Hinsley 1981:650-651)。NID12a は Government Communication Bureau。 NID14 は海軍事務局他。NID15 は D. N. A. D.（内容不明）との連絡機構。NID15a は D. T. S. D. （内容不明） との連絡機構。NID16 はロシア他。NID17 は J. I. C.（Joint Intelligence Sub-Committee）と J. I. S.（Joint Intelligence Staff）から構成され，諜報の調整を実行するセクションである。プロパガンダおよび連絡も担当。なお，DNI の事務室の隣にある「Room39」で作業を行う。NID18 は Naval Section Washington。NID19 は情報(Information)課。NID20 は占領されていないフランスの地域他。NID21 は Contacts と Interviewing。 NID21a は Contacts Register。地理課(Geographical Sections)として 1,2,3,4,16,20。を指示している。

2. 編集体制

1）GHS の書誌的事項

本シリーズは全巻で 59 冊 [10]から成り立ち，31 タイトル(国あるいは地域のグループ)に分けて記述している（写真 1 参照）。オックスフォード大学アーカイヴズ所蔵資料の内，「GHS のリスト」をもとに

写真 1　GHS 全巻
英国図書館マップ・ルームの書架に排架されている。
（撮影　英国図書館：2006 年 9 月）

作成した「GHS の刊行リスト（B. R. No 順）」（表 1）を紹介してみたい（Oxford University Archives 1946: GE20/3）。なお，日本国内での所蔵状況を知るために，アジア経済研究所図書館（以下，アジ研と略す）の所蔵分を記しておく。なお，GHS(一部分)の国内での所蔵状況は国立国会図書館他についても目録上で検索可能であるが，現時点では，資料の照合作業を行っていないので表 1 に記載していない。

この表から判明するように，刊行年は 1941 年から 1946 年であり，最初の巻は『ドデカネス諸島』*Dodecanese* で，最後の巻は『西部アラビアおよび紅海』*Western Arabia & the Red Sea* である。

GHS の収載している地域について見ると，軍事（海軍）上の戦略地域に関連しているが，地球上のどの国々を選定するかについての証拠はないと記されている（Clout and Gosme 2003:158）。当然含まれてしかるべき地域（国）が欠けている。例えば，日本。これには理由があった。1943 年 8 月，ゴッド

表 1　GHS の刊行リスト(B.R.No.順)

B.R.No.	タイトル	巻次・版表示	サブセンター	刊行年月	オックスフォード側での受け入れ年月	アジ研での所蔵状況
493	*Jugoslavia*	Vol. Ⅰ	ケンブリッジ	1944 年 10 月	1945 年　3 月	有
493a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1944 年 10 月	1945 年　5 月	有
493b	同上	Vol.Ⅲ	同上	1945 年　6 月	1946 年　1 月	有
500	*Dodecanese*		オックスフォード	1941 年 10 月	1941 年 12 月	無
500	同上	2nd ed.	同上	1943 年 12 月	1944 年　5 月	無
501	*Norway*	Vol. Ⅰ	同上	1942 年　1 月	1942 年　2 月	無
501a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1943 年　1 月	1943 年　2 月	無
502	*Spain & Portugal*	Vol. Ⅰ.　The Peninsula	同上	1941 年 12 月	1942 年　3 月	無
502a	同上	Vol.Ⅱ　Portugal	同上	1942 年 11 月	1943 年　3 月	無
502b	同上	Vol.Ⅲ　Spain	同上	1944 年　3 月	1944 年　3 月	無
502c	同上	Vol.Ⅳ　Atlantic Islands	同上	1945 年　1 月	1945 年　3 月	無
503	*France*	Vol. Ⅰ	ケンブリッジ	1942 年　6 月	1942 年 11 月	無
503a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1942 年　9 月	1942 年 12 月	無
503b	同上	Vol.Ⅲ	同上	1942 年 10 月	1943 年　7 月	無
503c	同上	Vol.Ⅳ	同上	1942 年 10 月	1943 年　9 月	無
504	*Iceland*		同上	1942 年　7 月	1942 年 11 月	無
505	*Algeria*	Vol. Ⅰ	オックスフォード	1943 年　2 月	1943 年　2 月	有
505a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1944 年　5 月	1944 年　7 月	有
506	*Morocco*	Vol. Ⅰ	同上	1941 年 12 月	1942 年　1 月	有
506a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1942 年 10 月	1943 年　1 月	有
507	*Turkey*	Vol. Ⅰ	同上	1942 年　4 月	1942 年　4 月	有
507a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1943 年　3 月	1943 年　3 月	有
508	*Corsica*		ケンブリッジ	1942 年 11 月	1943 年　8 月	無
509	*Denmark*		同上	1944 年　1 月	1944 年　5 月	無
510	*Indo-China*		同上	1943 年 12 月	1944 年　5 月	有
512	*French West Africa*	Vol. Ⅰ.(The Federation)	オックスフォード	1943 年 12 月	1943 年 12 月	有
512a	*French West Africa*	Vol.Ⅱ.(The Colonies)	同上	1944 年 12 月	1944 年 12 月	有
513	*Syria*		同上	1943 年　4 月	1943 年　4 月	有
514	*Palestine & Transjordan*		同上	1943 年 12 月	1943 年 12 月	無
515	*French Equatorial Africa*		同上	1942 年 12 月	1943 年　1 月	有
516	*Greece*	Vol. Ⅰ	ケンブリッジ	1944 年　3 月	1944 年　9 月	有
516a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1944 年 10 月	1945 年　8 月	有
516b	同上	Vol.Ⅲ	同上	1945 年　8 月	1946 年　8 月	有
517	*Italy*	Vol. Ⅰ	オックスフォード	1944 年　2 月	1944 年　2 月	無
517a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1944 年　8 月	1944 年　9 月	無
517b	同上	Vol.Ⅲ	同上	1945 年　8 月	1945 年　9 月	無
517c	同上	Vol.Ⅳ(Italian Islands, incl. Sardinia)	同上	1945 年 12 月	1946 年　2 月	無
518	*Northerlands Last Indies*	Vol. Ⅰ	ケンブリッジ	1944 年　4 月	1944 年　9 月	有
518a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1944 年 11 月	1945 年　8 月	有
519	*Pacific Islands*	Vol. Ⅰ. General Survey	同上	1945 年　8 月	1946 年　7 月	有
519a	同上	Vol.Ⅱ. Eastern Pacific	同上	1943 年 11 月	1944 年　2 月	有
519b	同上	Vol.Ⅲ.Western Pacific Tonga to Solomon Is.	同上	1944 年 12 月	1945 年　7 月	有
519c	同上	Vol.Ⅳ.Western Pacific New Guinia and Islands Northward	同上	1945 年　8 月	1946 年　8 月	有
521	*Belgium*		同上	1944 年　2 月	1944 年 12 月	無
522	*Belgian Congo*		オックスフォード	1944 年　4 月	1944 年　6 月	有
523	*Tunisia*		同上	1945 年　2 月	1945 年　5 月	有
524	*Iraq & the Persian Gulf*		同上	1944 年　9 月	1944 年　9 月	無
525	*Persia*		同上	1945 年　9 月	1945 年 10 月	無
527	*Western Arabia & the Red Sea*		同上	1946 年　6 月	1946 年　7 月	有
528	*Luxembourg*		ケンブリッジ	1944 年　9 月	1945 年 11 月	無
529	*Germany*	Vol. Ⅰ	同上	1944 年　1 月	1944 年　5 月	無
529a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1944 年　3 月	1944 年　9 月	無
529b	同上	Vol.Ⅲ	同上	1944 年 11 月	1945 年　5 月	無
529c	同上	Vol.Ⅱ	同上	1945 年　5 月	1946 年　7 月	無
530	*China Proper*	Vol. Ⅰ	同上	1944 年　7 月	1944 年 12 月	無
530a	同上	Vol.Ⅱ	同上	1945 年　6 月	1946 年　7 月	有
530b	同上	Vol.Ⅲ	同上	1945 年　7 月*	*	有
542	*Albania*		オックスフォード	1945 年　9 月	1945 年 10 月	無
549	*Notherlands*		ケンブリッジ	1944 年 10 月	1945 年　5 月	無

*「1946 年 8 月までに刊行されていないので未記入」との注が下記リストに記載されている。刊行年は原書の標題紙による。

(「GHS のリスト」(Oxford University Archives 1946: GE 20/3)をもとに筆者作成。)

フレイの後任の海軍情報部長官（DNI）E. G. N. Rushubrooke 准将は財政的理由から本シリーズの刊行を 1944 年末で完了することを決めた。キャンセルされた地域（ケンブリッジ・サブセンター（後述）担当部分で）には，日本，朝鮮，満洲，ロシア，タイ，東ヨーロッパの国々他があげられている。それらの地域にはすでに執筆が開始されているものもあった（Clout and Gosme 2003:158，164）。

2）二つの編集センター

本シリーズの編集について，ゴッドフレィは「（GHS は）主として大学から引き抜いた熟達な地理学者達の手によって NID 内で作成，編集された...」と記している（Naval Intelligence Division 1944:pref. iii）。厳密に言うならば, GHS の編集は，オックスフォード大学とケンブリッジ大学内にある各サブセンターで行われたとのべた方が正確であろう。これらのサブセンターは異なった機構，配属がなされていた。

はじめに，オックスフォード・サブセンターについてのべてみたい。このサブセンターの編集主幹は，「地理学者であり登山家」（Matthew and Harrison 2004d:188）であったメーソン教授であった。センターの所在地はオックスフォード大学地理学部 School of Geography（Mansfield Road）内にあり，学部とは密接な提携を行っていた（Freeman 1980:143）。NID6 つまり ISTD は地理学部に隣接したマンチェスター・カレッジ Manchester College（Mansfield Road）, NID11 つまり写真図書館は新ボドレィ図書館 New Bodleian Library 内に設置されていた。このように海軍情報諸機関がオックスフォードの中心地の一画をしめていたので，通称，この周辺は“Admiralty Village”と呼ばれていた（Goudie 1998:69）。これらの施設は徒歩 5-10 分圏内にある。サブセンターの構成メンバーを GE20/3 により紹介しよう。リストにはメンバーの就任時期は明記されているが, 退任時期は記載されていない。レギュラーのスタッフは，研究部門では 41 名，その内 2 名の肩書きは海軍軍人である。なお，研究担当の地域が示されている。製図等の作業部門では，14 名のスタッフが記載され，K. W. Hartland が主任で製図 10 名，タイピスト 3 名から構成されている(Oxford University Archives 1942: GE20/3)。ケンブリッジ・サブセンターでは Contributors がリストアップされているがここでは記載されていない。本リストに氏名が掲載されていないが，各巻に多数の Contributors，機関が協力している。これらの名前は各巻の付録等に明記されている。

「長」（Professor in Charge）であるメーソンは彼のスタッフを大学での授業の他にハンドブックの作成・編集にパート・タイムとして，作業に充てた（Clout and Gosme 2003:156-157）。積極的に，地理学部が作業へ協力体制をとっていたことがうかがえる [11]。

次にケンブリッジ・サブセンターについてみてみょう。

局長（Director-in-Charge）[12]として「極地探検家であり研究者」（Matthew and Harrison 2004e:298）であるワーディが就任し，編集主幹（Editor-in-Chief）としてダービィ Henry Clifford Darby[13]（1906-1992）が就任した。センターは，スコット極地研究所 the Scott Polar Research Institute: SPRI 内の 2 フロアーが提供された。

構成メンバーをオックスフォード大学アーカイヴズ所蔵のリストを参考にしてスタッフみると，研究部門のレギュラー（就任時期は明記）20 名 [14]，Contributors31 名，製図などの作業部門 13 名（全員レギュラー）である。ここでの特色のひとつは軍人の肩書きを有する研究者が見られないことである。他大学，機関からの研究者が幾人も，組み込まれている(Oxford University Archives 1942: GE20/3)。特に，Stanley Beaver (1907-1984), Hilda Ormsby (1889-1973), Andrew Charles O'Dell(1909-1966)などのロンドン大学の地理学者達である（Steel 1987: 79，88）。両サブセンター共，主力となる研究者は，相対的に若手で，20 台後半から 30 台前半の者であった（Clout and Gosme 2003:163）。

ケンブリッジ側の人員構成はオックスフォード側と比較すると，中核になる研究者を欠き，構成員についても複雑で面倒な面があったといわれている（Clout and Gosme 2003:161）。その理由のひとつは，スコット極地研究所（SPRI）の所長であるデベンナム教授および地理学部は，GHS の編集・企画に反対の態度を保持していたからである [15]（Balchin

1987 : 171)。戦争活動と SPRI とのいかなる関係にも強く反対していた。そこで，ケンブリッジ大学の研究者はパート・タイムとして，特に大学の休暇中に GHS の作業に参加していた（Clout and Gosme 2003:156-157)。

両サブセンターのトップの学問に対するアプローチの相違も GHS の編集・企画に反映されたのではないであろうか。メーソンは「地理学者であり登山家」であり，ダービィはフィールドより図書館ないしアーカイヴズでの研究に重点を置く歴史地理学者であった点を考慮してもよいのではないか。

3. 内容

本シリーズは，II の 2 で既述したように第一次世界大戦時に刊行された AGH の改訂あるいは再編集を意図したものではない。本シリーズの目的について，各巻の序で，ゴッドフレィは次のようにのべている (Naval Intelligence Division 1944:pref. iii-iv)。

> 第一に本シリーズの目的は，基本的に海軍用である[16]。艦長の使用向けに工夫されている。戦時ばかりか平和時にも彼らが訪問すると思われる国々について，総合的かつ便利な形式で情報（Information）を提供する。第二に，海軍における高水準の教育を維持するためであり，上陸時用の講義資料を将校に与える[17]。GHS は新しい国を訪問するすべての兵士に対して関心を抱かせかつ有益なものであることを保証する。

続けて，ゴッドフレィは「しかし，内容は，海軍の関心事ばかりに限られていない」とのべ（Naval Intelligence Division 1944:pref. iv)，歴史，行政，コミュニケーション等の多様な目的にも合致し，国々を全体的に取り扱かうべきであるとの指示もしている。従って，陸軍，空軍，他の政府機関は AGH よりもさらに価値あるものとして本シリーズを活用するであろうと結でいる。

筆者が本シリーズを調査した範囲の限りでは，内容（Contents）は細部での相違が見られるが，自然地理，歴史，国民および経済地理，港湾およびコミュニケーションの順序で排列されている。なお，本文中に多数の写真，図表，地図が掲載されている。地域（国）の初めの巻に附録として裏見返しにポッケット入りの折りたたみ地形図が付されている場合もある。さらに，附録として都市・地名リスト他が付されている。附録の充実さは AGH と異なる点である。IV で述べるように，戦時中に変化した社会事象で，本文中において記述しきれない状況は特別な章（例えば，*China Proper* Vol.III の VIII.「中国と香港における英国の利益」）を設けて最新記事を掲載している。

オックスフォードとケンブリッジの各サブセンターで作成した各シリーズには，編集上で異なる点がみられる。そのひとつは，本文を執筆する際に，読者の便を考慮して付された参考文献の記載方法である。ケンブリッジ側は，ほとんど各章末に充実した Bibliographical Note を付している。一方，オックスフォード側は，巻末に附録の一部として，Bibliographies, Literature 他の見出しで一括して参考文献を掲載している。

研究者が執筆した原稿は，海軍によって検閲されたのであろうか。Gilbert は *China Proper* の編集についてつぎのように述べている (Gilbert 1972 : 218)。

> （*China Proper*）第一巻の大部分は，Roxby[IV の 1 にて後述]の編集上の指示のもとに Freeman および他の者によって執筆された。Roxby は，中国に関して広大なスケールの著作を作成する長期的な計画を考えていたが，海軍本部による公的企画の枠組みが柔軟性を欠き，自分（Roxby）のスタイルを制限していることに気付いた。

ダービィの 1946 年の Manuscript(筆者未見)によると，「原稿は二段階で詳査された」と記されている。直接に海軍本部あるいは海事に関係する全事項が特別な精査を受けるようになっていた。海岸，港，漁場，貿易船および水路についての章は海軍本部によってチェックされた。気候[18]に関しての章は公的な気象学の機関によって精査された（Clout and Gosme 2003:158)。このように海軍本部による GHS の原稿精査作業が相当，厳しく実行されていたようである。研究者にとっては負担になったことであろう。

4. 地理学（史）上での意義

GHS の地理学（史）上での意味を検討してみよう。経済，社会状況についてのデータや対象内容は今日の視点からすると時代遅れの観を受ける。Freeman

は，「本シリーズは1930年代の状況を記した世界地誌のひとつである」と述べている(Freeman 1980:143)。この言葉はまさに，前述のことを証明しているように思える。しかし，Clout and Gosme は，歴史的，地形学的および地誌的事項は，活き活きとして現時点でも有効である。特に，ヨーロッパから離れた地域に関連している部分が活用できると主張している（Clout and Gosme 2003:153)。学史上では，該当資料（文献）の意義・意味は複眼（当時の知の世界ではどのような価値を有していたのか。現代ではどうなのか）で見て，判断を下さなければならない。これらの点について，中国のケースにおいて本稿 IV の 3 の（b）において検討してみたい。

シリーズ中の章末あるいは巻末に掲載されている参考文献は，完成度が高水準かつ高度な鑑識力によって選択されたものである。これらのリストは永続的で有意義である。この点についても本稿 IV の 3 の（d）にて検証してみたい。

第二次世界大戦終了後, GHS はいかなる影響を地理・歴史の学問あるいは教育に影響をあたえたのか。1950 年から 1960 年代における英国の学部レベルにおけるシラバス中に本シリーズはリストアップされ，記載されていた。このことは地誌（学）の講義を担当していた同時代の教員に有用であったことを証明しているのではないか（Clout and Gosme 2003:165)。

GHS は第二次世界大戦終了後，Cambridge University Press で刊行された歴史教科書シリーズ中に資料・地図が使用されている。

A Short History of Greece from Early Times to 1964 は，GHS の *Greece*(1944-1945 4 vols.)の歴史部分によっている（Heurtley et al. 1967:lower cover)。*A Short History…*の著者 4 名中, 3 名 W. A. Heurtley は *Greece* の第 1 巻の著者，H. C. Darby は *Greece* の第 1，3 巻の著者，C. W. Crawley は第 1 巻の Contributor である。姉妹書である *A Short History of Yugoslavia from Early Times to 1966* [19], *A Short History of France from Early Times to 1958* [20]も同様である。

Ⅳ *China Proper*

1. Percy Maude Roxby[21] (1880-1947)と中国研究

筆者は，GHS 中の *China Proper*（1944-1945，3 vols.）をとりあげ，既述の本シリーズの特徴を検証してみたい。

China Proper を検討の資料として選択した理由は二つある。第一に，筆者が兵要地誌研究を行ってきた対象地域が中国（満洲を含む）に限定していたので，他の地域よりも若干，地理情報を多く有していると思われたからである。第二に，III の 4 で既述したように Clout and Gosme は，（GHS の）歴史的，地形学的および地誌的事項は，特にヨーロッパから離れた地域に関連している部分で有効であると主張している。ヨーロッパから離れた地域として中国を選定したのである。

China Proper はケンブリッジ・サブセンター側で Roxby を中心に編集されている。彼自身も執筆に加わっている。そこで，はじめに Roxby と中国研究の係わりについてのべておこう。

1912 年，Roxby（当時，リバプール大学 Liverpool Univ. 経済学部講師）は，Albert Kahn Traveling Fellowship[22]を得て，1912 年 9 月から 1913 年 9 月までの期間，中国，日本を含む世界ツアーに赴く。この旅で生涯のメインテーマとなる中国への関心を深めた（Gilbert 1972:216）（Freeman 1967:159)。彼の中国に関する最初の論文は武漢に関する，“Wu-han : the Heart of China” *Scottish Geographical Magazine* 32(1916)，266-278. である。Roxby の最も重要な論文は，中国の人口についての，“The Distribution of population in China” *Geographical Review* 15(1925),1-24.（筆者未見）であると言われている(Gilbert 1972:218) (Freeman 1981: 115)。なお，彼の人口に関する研究の基礎資料は，宣教師達の観察に基づく報告により中国の人口推定値を記した，*The Christian Occupation of China* (Shanghai, 1922)であった。彼はこれをおおいに利用した（Freeman1967: 159)。本書は, 後述する *China Proper* Vol.II 中においても参考資料として活用されている。

中国研究の初期段階で，Roxby は中国の南東，中央，北部地域の住民の間で相違が存在するが，広大

な地域を通じて，相当，同質化していることを理解した（Freeman　1981: 112）。次第に儒教を理解し，新しい視点を得た。科挙制度により選ばれた官僚によって支えられた皇帝の絶対的な権力を基盤にしている中央集権国家を背景にして，家族構成と村落との結合を通じて，儒教精神が広く普及する中に中国の真の一体感があるという見解を Roxby は確信した（Freeman 1967: 159）。彼は中国に関する総合的な地理学を―ひとりあるいは協力者と共に―著述することを常に願っていた。（Freeman 1981: 113）。彼の中国についての知識を最終的に結実したものが次項でのべる *China Proper* である。

2. 書誌的事項および目次

China Proper 3 冊の書誌的事項を順次，つぎに記してみよう。

記述法

1) 図書の内容を知るために，必要とおもわれた目次等は，対照事項の後の（内容）項中に記した。

2) 筆者が必要と思われる語・数を補記した場合には［］記号を使用した。説明，その他付加的に記す場合には（）記号をしようした。

3) 頁数の記入は第何ページから第何ページまでを示す。ノンブルの付されていない場合には補記として［］内に表示する。

4)「注」は当該箇所の右肩に（番号）と付して，書誌的事項の後に「注」として解説を試みた。

（タイトル）China Proper Vol. I [(1)]

(サブ・タイトル)Physical geography, history and peoples

（責任表示）Naval Intelligence Division

（出版地）［London］

（出版年月）1944 年 7 月

（頁数）xvi,　542p. ：charts, maps, plates.

（大きさ）23cm（8 vo.[(2)]）.

（シリーズ）(Geographical handbook series ; B. R. 530) .

(内容)

Preface ［iii］-iv, Contents [v]-viii, Summary of contents of handbook on China Proper ［ix］, List of maps and diagrams ［x］-xii, List of plates [xiii]-xvi,（本文）[1]-462, 附録 I [463]-469, 附録 II[470]-476, 附録 III [477]-486, 附録 IV[487]-507, Conversion tables [508]-512, Index [513]-542, 1 large holding map (China, 1:5000000)

注 (1) タイトル・ページの上部に“ Restricted”（部外秘），“For official use only”と記載されている。II, III 巻も同様。タイトル裏ページに“This volume was produced and printed for official purposes during the war 1939/45”の貼り紙が付されている。なお，この貼り紙の下には“This book is for the use of persons in H. M. Service only and must not be shown, or made available, to any member of the public”と印刷されていた（他書で確認）。文中の“H. M. Service”は“His（Her） Majasty Service”の略である。

China Proper は 2500 セットが刊行され，“For official use only”の件については 1955 年までに解除され，一般に販売された（Freeman 1967: 160）（Clout and Gosme 2003:165）。

(2)表紙（Cover）はオリジナル・クロスで，色は緑である。Ⅱ，Ⅲ巻も同様。他に GHS の表紙には赤，褐色等がある。色の区別の規準は不明である。

（タイトル）China Proper Vol. II

(サブ・タイトル)Modern history and administration

（責任表示）Naval Intelligence Division

（出版地）［London］

（出版年月）1945 年 6 月

（頁数）xii,370 p.: charts, maps, plates.

（大きさ）23cm（8 vo.）.

（シリーズ）(Geographical handbook series ; B. R.530A).

(内容)

Preface ［iii］-iv, Contents [v]-vii, Summary of contents of handbook on China Proper［viii］, List of maps and diagrams ［ix］, List of plates [xi]-xii,(本文)[1]-302, 附録 I [303]-309, 附録 II[310]-315, 附録 III[316]-339, 附録 IV [340]-349, 附録 V[350]-352, Index [353]-370.

（タイトル）China Proper Vol. III
(サブ・タイトル)Economic geography, ports and communications
（責任表示）Naval Intelligence Division
（出版地）［London］
（出版年月）1945 年 7 月
（頁数）xiv. 653p.: charts, maps, plates.
（大きさ）23cm（8 vo.).
（シリーズ）(Geographical handbook series ; B. R. 530B).
(内容)
Preface ［iii］-iv, Contents [v]-vii, Summary of contents of handbook on China Proper［viii], List of maps and diagrams ［ix］-x, List of plates [xi]-xii,（本文）[1]-574, 附録 I [575]-577, 附録 II [578]-593, 附録 III [594]-601, 附録 IV [602]-605, 附録 V [607]-613,Conversion tables [614]-618（Vol.I と同じ）, Index [619]-653。

目次をつぎに記してみよう。
第 I 巻
第 1 部　自然地理　1.序　2.概略的な自然記述　3.北部中国　4.中央中国　5.南部中国　6.沿岸　7.土壌と土壌の侵食　8.気候と天候　9.植生　10.病気と衛生。第 2 部　歴史と住民　11.18 世紀末までの中国史概説　12.歴史的文明　13.中国の国民　14.中国語（書き方）　15.国語と方言。　附録 I 地名, 附録 II 中国における地質の進化, 附録 III 中国語のローマ字表記の比較, 附録 IV 地図と海図。

第 II 巻
1.1912 年の清国崩壊までの近代史概説　2.近代中国史の概説　3.戦時中（1937-1944 年）の中国 4.1922 年以来の中国の外交政策　5.政府と行政　6.中国の法制　7.教育　8.人口の増加と分布。　附録 I 英国と中国との文化的関係, 附録 II 主たる都市, 附録 III 香港, 附録 IV マカオ, 附録 V 広州湾租借地 [フランス]。

第 III 巻
1.農業と森林管理　2.漁業　3.鉱業　4.工業　5.貿易　6.通貨と金融　7.南部中国の港　8.上海と揚州の港　9.北部中国の港　10.道路　11.鉄道　12.水路　13.中国と香港における英国の権益　附録 I 食品と栄養に関するノート, 附録 II 海運, 附録 III 郵政, 電信, 電話, 附録 IV 民間航空, 附録 V 中国の度量衡。

ほとんど全ての各章末に“Bibliographical Note”を付し, 参考資料（雑誌記事を含む）を列記している。

3. 本文の検討

全三巻を通じて本文の内容構成を検討してみよう。はじめに, 全体の構成を調べてみよう。本文（附録を除く）の章数・頁数は, 第一巻 15 章（全 463 頁), 第二巻 8 章（全 303 頁), 第三巻 13 章（全 575 頁）で計 36 章（計 1361 頁）である。本文および附録に収録されている地図・図表は 251 図・表（一部にノンブルが付されず, この数字以外の図も存在している）である。写真は 367 葉である。本稿 III の 3 でのべたようにここでも地図・図表, 写真が多用され, 記述も専門用語がすくなく, 研究者でない読者層にも理解し易いように構成されていることが判る。

執筆者および編集者を見てみよう [23]。各巻の序に記載されている者はつぎのとおりである。第一巻の主たる執筆者は, P. M. Roxby と T. W. Freeman である。Contributors は, L. Giles, J. L. Maxwell, P. O'Discoll[24], W. Simon である。編集担当は P. M. Roxby. なお, 下線を付されている者は GE20/3 のリストの China 担当に記載されている研究者である。

第二巻の主たる執筆者は, P. M. Roxby。 Contributors は, T. W. Freeman, B. M. Husain, Yuen-li Liang, George Moss, P. O'riscoll, John Pratt, J. C. Stuttard, C.S. Wang。編集担当は P. M. Roxby で助手に P. O'Discoll。第三巻の主たる執筆者は, B. M. Husain, P. O'Discoll。Contributors は, W. R. Cockburn, E. M. Gull, H. A. P. Jensen。編集担当は P. M. Roxby と P. O'Discoll。P. O'Discoll は主たる執筆者の一人および編集担当であるが前記のリストには記載されていない。R. B. Hawes の氏名は前記のリストには記載されているが, 序に見当たらない。Roxby は主たる執筆者あるいは編集者として全巻にかかわっていたことが判る。

ここでいくつかの視点から本書の内容構成を分析，検討し列挙してみよう。

（a）はじめに *China Proper* を一国の地誌つまり「国家地誌」の視点から検討を加えてみよう。

本項では国家地誌の記載内容の構成要素としてつぎの 2 点を考えてみたい。第一に，国家の成立過程（古代―現代），国土の形成過程（位置や形態の概略を含む）を記述すること。第二に，自然的部門と人文・社会的部門に関する記述を行うことである。これらの事項に本書はいかに対応しているのかについてみてみよう。

自然的部門つまり自然地理に関する部分は第 I 巻の第 1 部　自然地理の部分であり，10 章分（全巻の約 28%）である。第 1 部では国土の形成過程についても言及している。1.序において中国（China Proper）および外縁部の定義を行っている。2.以降で国土の形成，位置等についてのべている。地域区分についてもここで記している。北部中国，中央中国，南部中国の 3 区分に分けている。社会・人文的な部分についてみると，経済地理および関連する章が第 III 巻の全章（全巻の約 36%）であり，歴史的内容（歴史的背景）に関する部分が第 I 巻の第 2 部第 11 章，第 12 章および第 II 巻　第 1，2，3 章の計 5 章分（全巻の約 14%）である。これら三部門で全体の 3/4 以上を占めている。本書は経済地理，自然的部門，歴史的内容を重視し，特に歴史的内容に 5 章分を割いている。この点に筆者は注目したい。戦前に出版された国家地誌書『支那』（全 507 頁）では歴史的内容について小川琢治により執筆された「概説」中で触れられている(小川 1933:9-11)が，特に歴史を専門にした章は存在しない。また，戦後に刊行された木内信蔵編『東アジア』中の 3.中国(p.129-p.441;全 313 頁)ではⅡ社会 1 .歴史地理（河野通博担当）（p.162-p.170）（全体の 3%）が歴史関連部分として記載されているのみである(河野 1984:162-170）。前記二書と比較すると *China Proper* は歴史部門を重要視していたかが裏付けられるのではないであろうか。歴史重視の姿勢の理由のひとつは，編集の中心となる Roxby が地理学者であると同時に歴史学者であったことによるのではないか。彼は，「近代中国は，偉大な歴史的過去に根ざしている」との信念（Roxby 1942 : 3）から現代（当時の）中国社会を分析する上で歴史的認識に重きを置いたと思われる。

（b）Freeman は，「（GHS を）1930 年代の状況を記述した世界地誌の一種である」（筆者下線）と述べている（Freeman 1980 : 143）。*China Proper* の内容も 1930 年代の中国社会を記述しているのであろうか。

本書は 1930 年代のデータを参考にし，章末のビブで 30 年代の学術雑誌記事を参考文献に記載している部分があることを筆者は認める。経済・社会（システム）状況についてやや時代遅れとの意見もある。しかし，1940 年代に関する記事も多数，見受けられるので検証を試みたい。

第 II 巻を見ると，戦時中（1940 年代前半）の経済・社会（システム）状況を解説している記事を散見する。例えば，3.中の戦時中（1937-1944 年）の中国，4.中の治外法権の終わり―1943-44 年（p.169-171），5.中の戦時中の政府（p.187-190），7.中の現在の教育システム，特に近年の発展（p.231）があげられる。

第 III 巻の 1.から 6.までの各章中に「戦時中の発展，1937-44 年」の節をそれぞれ設けて近況を解説している。Chinese Ministry of Information の *Chine Handbook,1937-1943*（1943)(p.70,71,72,190 に引用), *Statistical Abstract of China,1940*(1940)(p.38 に引用)など 1940 年代の情報・統計データを参照している。これらの事実から本書は 1930 年代の状況を反映した時代遅れの地誌ではなく，1940 年代前半当時のデータをも随所に取り入れた地誌ではなかろうか。

（c）本稿 II の 2 の(ｂ)で既述したように，Clout and Gosme は AGH が道路，鉄道，その他コミュニケーション（輸送機関）に関する記述を強調しているとのべている（Clout and Gosme 2003:154-155)。*China Proper* ではこの点はどのように変化しているのであろうか。

道路・。鉄道・水路は第 III 巻　10，11，12 の各章において単立に扱われている（掲載頁数の計 128 頁)。コミュニケーションのひとつである港については第 III 巻　7，8，9 の章（掲載頁数の計 204 頁）で南部，上海と揚州，北部地域の港を記載している。これらの頁数の合計は 332 頁である。三巻全体の約

24%であり，1/4 である。AGH の場合，図書によっては総頁数の半分を道路，鉄道，その他コミュニケーション（輸送機関）に関する記事が占める場合があった（Clout and Gosme 2003:155）。Clout and Gosme の見解にしたがえば，本書における上記事項の割合は半減したと言えよう。

（d）章末に付されている Bibliographical Note に収録されている資料について検討してみよう。

収録図書および雑誌の使用言語は英語（中国語からの翻訳も含む）が中心であり，仏・独語も見られる。中国語の文献（タイトル・著者を英訳）も部分的に紹介している。筆者はこれら収録資料が当時，学術的と受け止められていたものが選択されていたかを調査することを試みた。はじめに，二次資料として編者の選択性が強く（網羅的でない），1945 年以前の刊行物をも対象とし，英語文献を主として収録しているビブリオグラフィーを検索した。結果，Hucker の *China: A Critical Bibliography* [25]（以下，*China Bib.*と略す）を選定した。本ビブに取り上げられている資料は“編集者の意見として学術的研究用”（Hucker 1962: foreword v）の図書・雑誌記事等である。*China Bib.* の選択基準は Hucker の「独自の責任」（Hucker 1962: foreword vi)によるが，選択された資料は学生，教員および研究者全てのレベルに適応していると記されている（Hucker 1962:foreword v)。本ビブをベースに Bibliographical Note 収載資料について，いくつかの事例をあげて検討する。

China Bib. の Land and Peoples（節）中“Topography, Climate, Resources”の項に 9 点の資料が収録され，内 1945 年以前に刊行されたものが 5 点（刊行終期が戦後のものを含む）ある。それら 5 点中，*China Proper* の Bibliographical Note に記載されている図書が 3 点ある。それらは，Cressey の *China's Geographic Foundations*(1934)（*China Proper* に記載されている箇所：Vol.I. p.246, Vol.II. p.301, Vol.III. p.72），Lee の *The Geology of China* (1939)（同：Vol.I. p.48）と National Geological Survey of China の *Bulletin*(1919-48)（同：Vol.I. p.202)。“The People”の項をみると，8 点が収録され，内 1945 年以前に刊行されたものが 2 点ある。*China Proper* の Bibliographical Note に記載されている図書は，Li Chi の *The Formation of the Chinese People.* (1928)（同：Vol.I. p.432）1 点である。しかし，戦後分の Latourette の *The Chinese：Their history and Cultune.* (3d ed. Rev.) の初版（1934 年)は Vol.I. p.364 に記載されている。Economic Patterns(節)の“Agriculture”の項に 22 点の資料が収録され，内 1945 年以前に刊行されたものが 8 点ある。それら 8 点中，*China Proper* の Bibliographical Note に記載されている図書が 3 点ある。Buck の *Land Utilization in China.* (1937)(同：Vol.III. p.72), *Chinese Farm Economy.* (1930) (同：Vol.III. p.72), King の *Farmers of Forty Centuries.* (1911)(同：Vol.III. p.73)である。*China Bib.*に該当項（目）が存在する場合，他の項においても上記とほぼ同様の結果を得た。これらの資料は至当に *China Proper* の本文中で引用・参照されている。上記の事実は *China Proper* が当時（1940 年代前半），学術的内容を保持した資料を活用し，構成されていることを傍証していると思われる。

雑誌記事について調べると，*Geographical Journal* および *Geographical Review* に掲載されていたものをはじめとし，仏・独語の雑誌からのものもみられる。中国各地（北京，上海，南京他）で出版された英語の逐次刊行物からの記事名も収録されている。

（e）中国と英国との関係を分析した特別な章・附録が設定されている。これらの章・附録についてしらべてみよう。

本文中（例えば，経済地理関連の章）においても部分的に中国と英国との関係を既に言及している。しかし，つぎの章・附録は特に，中国と英国との関係を専門的に詳しく分析している。

A. 第 II 巻　附録 I 英国と中国との文化的関係
B. 第 III 巻　13.中国と香港における英国の権益

A.ではつぎの主旨がのべられている。過去において，中国における英国の関心事は商業的であり政治的関係であった。近年，1935 年にロンドンで開催された中国大芸術展が英国国民の目を開かせ，関心を喚起させた。

比べると，中国教育のニーズへの英国の貢献度は長期にわたり低く，英国の大学における中国文化の

研究，中国問題についての機関は少なかった（ロックフェラー財団による財政的援助などの米国事例と比較）。近代中国教育への最大の英国の貢献は香港大学を通じて実施されていると述べている。ブリテッシュ・カウンシルの活動にも言及し，この機関は近い将来，芸術，社会科学，人文科学の分野でも学術交流を盛んにすべきであると主張している。

B.の章はつぎのような内容がのべられている。

英国の権益の特質。条約港制度（香港をはじめ開港された処における外国人居住地などの治外法権他）。1914 年まで貿易と投資。1914 年から 1918 年間の第一次世界大戦の影響。1917 年から 1937 年までの間の貿易と投資。日清戦争の影響。将来の展望（結論）。Bibliographical Note.

筆者は結論で *China Proper* の編者が二つの仮定を記していることに注目したい。一つは，汪精衛（1883-1944）の「国民政府」（南京）が消滅し，現（当時の）中国政府（共産主義者政府）が統一された中国の長として引き続き統治するであろう。つぎに，現在，中国の通貨制度は厳しいインフレ下にあるが，国際的に受け入れられる数字で安定するであろう。B.は地誌学的視点というよりも地政学的視点から分析を行っているように見受けられる。

V　*China Proper* は「兵要地誌」と言えるのか

本章では結語にかえて，*China Proper* が国別地誌であり，兵要地誌とはみなされないのではないかという点について検討を試み，簡潔に述べてみたい。

筆者はかつて「兵要地誌」を「兵要地誌（理）は，基本的に戦略・作戦と結び付き，事前の準備・用意の役目を果たす応用地理学といえよう」と定義した（源 2000：38）。防衛庁防衛研修所戦史室では，「作戦・軍事上の見地から，必要な地形・地勢・気象・人文・産業産物等に関する調査及び研究を行った資料を書類としたもの」と解説している（防衛庁防衛研修所戦史室 1980：384）。本稿 III の 3 で既述したようにゴッドフレィは，GHS を「第一に本シリーズの目的は，基本的に海軍用である。艦長の使用向けに工夫されている」資料であると述べている。この点において本書（GHS の一部）の作成目的は，兵要地誌の「戦略・作戦と結び付き」および「作戦・軍事上の見地から」の見解 と類似している。

筆者は，参謀本部調製（作成）の中国（旧・満洲を含む）を対象地域としている兵要地誌概説（以下，「概説」と略す）について考察をおこなった（源 2000:37-61）。 *China Proper* と「概説」とを内容記述に関して比較をし，本書に「兵要地誌」的要素が含まれているかをしらべてみる。

「概説」は，本文の初めに用兵的観察を記した章を設定し，当該地の作戦展開ないし戦略上の価値（位置づけ），作戦兵力その他 [26]を述べているものが大部分である。一方，*China Proper* では本稿 IV の 2 の目次で示したようにアカデミックで伝統的な地誌の叙述体系に従い，地域の自然地理的要素から記載し，地域の作戦展開ないし戦略上の価値については言及していない（「概説」では地勢についても記述している）。「概説」では，宿営（軍隊が宿泊に必要な家屋・土地）・給養（軍隊で人・馬などに必要な物資の供給）が記載されている。*China Proper* では農業などの経済地理関連項目で小麦などの生産についてのべているが，軍隊向けの内容ではなく，宿営・給養の項目は見られない。「概説」に付されている作戦路図が *China Proper* には見られない。

両資料共に交通，通信，衛生，住民，主要都市に関する項目は記載されている。

上記の結果から *China Proper* は作成目的上では兵要地誌的ニュアンスを感じ取る。しかし，記述内容では兵要地誌と乖離している部分が多くあるように見受けられた。

今後の課題のひとつについて述べておこう。

単純には比較できない要素が多数存在するが，1930 年から 1940 年代代当時の日本における中国研究書（地誌）と *China Proper* との比較検討を試みたい。このことにより，*China Proper* の新たな価値を見出すことが可能になるのではないか。

市古・フェアベンクは，「今でも中国の歴史研究に大いに役立つ地誌」として『新修支那省別全誌』（全 9 巻　1941-1946）[27]を評価している（市古・フェアベンク 1974：3）。本地誌は東亜同文書院の書院生の調査報告書を活用して編纂されたものである。既に藤田佳久による研究書がある [28]。『新修支那省別全誌』は省別に記した地誌（未刊部分ある）であり，

中国全域を対象にしたものではない。この点からも相互に，精密に比較することはできないが，限定を加えて検討するに値すると推測される。

本稿末にグールドの言葉を付しておこう(Gould 1985:186)。

> 地理学が戦争遂行を主要な目的とする学問であると決め付けることは,極めて愚かであるというのが私（グールド）の考えである。

拙稿を作成するにあたり，Izumi K. Tytler オックスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館館長にはオックスフォード大学アーカイヴズへの紹介の労をとっていただいた。北岡　元国立情報学研究所教授には貴重なご助言を賜った。研究の一部は，2006 年度文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（B）（一般）「グローバル化時代における公共空間と場所アイデンティテェの再編成に関する研究」（研究代表　高木彰彦　課題番号 18320136）の研究集会（2006 年 12 月 26 日，KKR 山口　あさくら）で発表し，参加者から有意義なご助言がなされた。資料の閲覧・貸し出し等について英国図書館，オックスフォード大学アーカイヴズ，アジア経済研究所図書館，駒沢大学図書館に便宜を計っていただいた。以上の方々，諸機関に厚くお礼申し上げる。なお，本稿は，前記研究補助金を使用した。

筆者は，脱稿後，ウェッブ・サイト上で Cyril Gosme 単著論文 “The Naval Intelligence Geographical Handbooks Series (Great-Britain, 1942-46): A Description and a Call for Comments”，を見出した。本論文は，Clout and Gosme (2003)の文献リスト(p.171）中に，“Unpublished”（未刊）と記された文献と同一である。今後，Gosme 単著論文およびアーカイヴスに所蔵されている未入手資料を含め，検討して，新たなる研究成果を発表してみたい。

注

1）源　昌久 2000. わが国の兵要地誌に関する一研究―書誌学的研究．空間・社会・地理思想 5:37-61.　源　昌久 2002．石井（第七三一）部隊と兵要地誌に関する一考察―書誌学的研究．淑徳大学社会学部研究紀要 36:209-226.　源　昌久 2004．関東軍の兵要地誌類作成過程に関する一考察―書誌学的研究. 淑徳大学社会学部研究紀要 38:203-218.

2）Hinsley は「1882 年」と記している（Hinsley 1979: 7）。

3）Clout and Gosme はハンドブック 27 種，マニュアル 27 種と記している(Clout and Gosme 2003:154-155)。

4）同じ文言がすべての巻の Preface に付されている。（Naval Intelligence Division 1944:pref. iii-iv）. 以下，pref.は同様。

5）海軍将校かつ情報将校である。彼の伝記的事項およびレファレンスは（Matthew and Harrison 2004c:568-569）を参照。

6）彼の伝記的事項およびレファレンスは（Matthew and Harrison 2004a:659-661）を参照。

7）彼の伝記的事項およびレファレンスは（Matthew and Harrison 2004e:298-299）を参照。

8）第二次世界大戦中，英国海軍情報部に勤務した．1939 年 9 月 3 日付けでゴッドフレィの Personal Assistant および NID17 のスタッフを併命された（Oxford University Archives 1942: GE20/3)。フレミングが著した小説，OO7 シリーズ中に登場する James Bond の上官「M」のモデルのひとりは，ゴッドフレィである。フレミングの伝記的事項およびレファレンスは（Matthew and Harrison 2004b:55-56）を参照。

9）彼の伝記的事項およびレファレンスは（Matthew and Harrison 2004d:188-189）および(Goudie 1988:67-72)を参照。

10）Clout and Gosme および Balchin は，58 冊と記している（Clout and Gosme 2003:153）（Balchin 1987: 171)。筆者が推測するに，*Dodecanese* の初版（1941 年）と 2nd ed.(第二版) (1943 年）とを識別していないことからこのような誤りが生じたのではないか。

11）オックスフォード大学アーカイヴズ中の地理学部のサイトの“Note”では「メーソン教授は，戦時中各地の GHS の編集に加担するように英国海軍情報部によって話をもちかけられた。メーソン教授と地理学部の多くのスタッフはオックスフォード大学には内緒でシリーズの刊行を調査することに従事していた。英国海軍情報部のある課（NID5）が海軍と地理学部から人材を選りすぐり，オープンした」と記されている (http://www.oua.ox.ac.uk/holdings/catalogues.html (最終アクセス 2007 年 11 月 7 日))。

12）雇用形態はパート・タイムであり，1943 年 11 月に辞職している（ Balchin 1987:171)。Clout は辞職時期を「1943 年 9 月」としている（Clout 2007:82)。

13）ダービィは，36 歳の時，リバプール大学地理学部において Roxby(本稿 V でのべる)の後継者となり，学部長に指名される。彼の伝記的事項およびレファレンスは（Matthew and Harrison 2004a:112-113）および(Clout 2007:79-97)を参照。

14）Clout and Gosme は，1942 年までに，10 名のフル・タイム（レギュラー）が就任していると記している

（Clout and Gosme 2003:161）。

15) Stoddart によると，「SPRI は諜報活動に使用されていたが，Deb(Debenham)は所長であるにも拘わらず，活動から排除されていた」と記している（Stoddart［1988］:13-14)。

16）ダービィは，「（GHS は）対象地域に関し，戦闘を進行させる目的で作成されたものでない」と戦後に記しているとのことである（Clout 2007:82)。出典源の Darby 1947.*The theory and practice of geography: an inaugural lecture.*は筆者未見である。

17）*Syria*（アジ研所蔵本）のタイトル・ページに旧所蔵者のスタンプ“Western Command Education Library”,見返しには“Garrison Library”が捺印されている。*Algeria* Vol.II の見返しにも“Command Education Library　H.Q. N.I.D Belfast”の印がみられる。GHS は，兵士の教育用図書として常備されていたのではないか。

18) Ratcliffe は, 1944 年 6 月, フランス上陸作戦（D-Day）においての例等を示し、第二次世界大戦中の戦略と天気予報との密接な関係を述べている（Ratcliffe 1984:219-221)。

19）Darby,H.C.,Seton-Watson, R. W., Auty , P., Laffan, R.G.D. and Clissold, S.1966. *A short history of Yugoslavia: from early times to 1966*. 281p. Cambridge: Cambridge Univ. Pre.

20）Butterfield, H., Brogan, D.W., Darby, H.C. and Jackson,J.H. 1959. *A short history of France from early times to 1958.* 221p. Cambridge: Cambridge Univ. Pre.

21）彼の伝記および書誌的事項については（Freeman 1981: 109-116）を参照。

22）パリの M. Albert Kahn により世界中を旅行するための奨学資金が拠出され，毎年 2 名が選ばれる。

23）Freeman によると，「(*China Proper* は)15 名の人の著書であり，その内 4 名が主たる者で，他 11 名は特別な章を執筆した」とのべている(Freeman 1960:125)。

24）P. O'Discoll は，1910 年生まれで，NID5 に 1943 年から 1945 年まで在職した（Clout and Gosme 2003:162)。

25) Walford は，（中国研究に関して）「*China Bib.* はアリゾナ大学東洋学部のスタッフの手によるアジアについての 4 種のレファレンス・ガイドの内，第一にあげられる」と評している（Walford 1968: 272)。市古・フェアバンクは，「これは 1000 以上の図書，論文に解説を付して事項別に排列したもの」と紹介している（市古・フェアバンク 1974:1)。

26）兵要地誌の作成マニュアルのひとつである『兵要地理資源調査報告例規』の“第二章　用兵的観察”によると，その内容は“第二節　作戦軍ノ兵力，編制，編組並びに装備”，“第三節　作戦地方ノ特性ニ応ズル作戦要領”として記されている（大本営陸軍部　1944：10)。

27）本地誌シリーズの前に，書院生の報告書の成果として『支那省別全誌』(1917-1920，全 18 巻）が刊行されている。

28）例えば，藤田佳久『東亜同文書院　中国大調査旅行の研究』(2000 年）がある。この他にも藤田は本地誌シリーズについて研究を発表している。

文献

市古宙三・フェアバンク, J.K.　1974.『中国研究文献案内』東京大学出版会.

小川琢治　1933. 概説. 山本三生編『支那』9-11. 改造社（地理講座　外国篇・第 2 巻).

北岡　元　2002.『英国の情報体制―委員会による取り纏めが機能する条件』世界平和研究所（IIPS Policy Paper 283J).

河野通博　1984. II 社会 1.　歴史地理.　木内信蔵編『東アジア』162-170. 朝倉書店（世界地理　2).

大本営陸軍部　1944.『兵要地理資源調査報告例規』大本営陸軍部.

トレヴェリアン, G.M. 著　大野真弓監訳　1975.『イギリス史　3』みすず書房. Trevelyan, G.M. 1926. *History of England*. London: Longmans,Green.

日本図書館情報学会　2002.『図書館情報学用語辞典　第 2 版』丸善.

日本地誌研究所　1989.『地理学辞典　改訂版』二宮書店.

日本国語大辞典第二版編集委員会　2001.『日本国語大辞典　第 2 版』小学館.

久武哲也　2005.『兵要地理調査研究会』について. 渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部―渡辺正氏所蔵資料集』5-19. 大阪大学文学研究科人文地理学教室.

藤岡謙二郎・西村睦男・浮田典良・服部昌之　1973.『世界地誌―改訂地誌概論』大明堂.

防衛庁防衛研修所戦史室　1980.『陸海軍年表　付　兵語・用語の解説』朝雲新聞社（戦史叢書).

源　昌久　2000. わが国の兵要地誌に関する一研究―書誌学的研究. 空間・社会・地理思想 5: 37-61.

山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚　章編 1997.『人文地理学辞典』朝倉書店.

Andrew, C. 1985. *Secret Service: The making of British intelligence community*. London: Heinemann.

Balchin, W.G.V. 1987. United Kingdom geographers in the Second World War. *Geographical Journal* 153: 159-180.

Clout, H.D. 2007. Henry Clifford Darby 1909-1922

Geographers: Biobibliographical Studies 26:79-97.

Clout, H. and Gosme C. 2003. The Naval intelligence handbooks: A monument in geographical writing. *Progress in Human Geography* 27: 153-173.

Freeman, T.W. 1960. The authorship of the China admiralty handbook. *Geographical Journal* 126: 125.

Freeman, T.W. 1967. *The geographer's craft*. Manchester: Manchester Univ. Pre.

Freeman, T.W. 1980. *A history of modern British geography*. London: Longman.

Freeman, T.W. 1981. Percy Maude Roxby 1880-1947. *Geographers: Biobibliographical Studies* 5: 109-116.

Gilbert, E.W. 1972. *British pioneers in geography*. Newton Abbot: Daivid & Chrles.

Gosme, S. 2007. The Naval intelligence geographical handbook series (Great-Britain, 1942-46): A description and a call for comments. (article 137) (http://www.cybergeo.eu/index4460.html（最終アクセス 2007 年 12 月 9 日)).

Gould, P. 1985. *The geographer at work*. London: Routledge & Kegan Paul. グールド，P. 著．杉浦章介・二神真美共訳 1989.『現代地理学のフロンティア（上)』地人書房．グールド，P. 著．矢野桂司・立岡裕士・水野 勲共訳 1994.『現代地理学のフロンティア（下)』地人書房.

Goudie, A.S. 1998. Kenneth J. Mason 1887-1976. *Geographers: Biobibliographical Studies* 18: 67-72.

Heurtley, W.A., Darby, H.C., Crawley, C.W. and Woodhouse, C.M. 1967. *A short history of Greece from early times to 1964*. Cambridge: Cambridge Univ. Pre.

Hinsley, F.H. 1979. *British intelligence in the Second World War : Its influence on strategy and operations*. Volume I. London: HMSO.

Hinsley, F.H. 1981. *British intelligence in the Second World War : Its influence on strategy and operations*. Volume II. London: HMSO.

Hucker, C.H. 1962. *Chin: A critical bibliography*. Tucson: Univ. of Arizona Pre.

Matthew, H.C.G. and Harrison, B. ed. 2004a. *Oxford dictionary of national biography*. Volume 15. Oxford: Oxford Univ. Pre.

Matthew, H.C.G. and Harrison, B. ed. 2004b. *Oxford dictionary of national biography*. Volume 20. Oxford: Oxford Univ. Pre.

Matthew, H.C.G. and Harrison, B. ed. 2004c. *Oxford dictionary of national biography*. Volume 22. Oxford: Oxford Univ. Pre.

Matthew, H.C.G. and Harrison, B. ed. 2004d. *Oxford dictionary of national biography*. Volume 37. Oxford: Oxford Univ. Pre.

Matthew, H.C.G. and Harrison, B. ed. 2004e. *Oxford dictionary of national biography*. Volume 60. Oxford: Oxford Univ. Pre.

Naval Intelligence Division 1944. *China proper*. [London]: Naval Intelligence Division.

Oxford University Archives 1942. GE 20/3 *Naval Intelligence Division*. (From Mason).

Oxford University Archives 1946. GE 20/3 *Admiralty geographical handbooks*.

Prytherch,R. comp. 2005. *Harrod's librarians' glossary and reference book: A dictionary of over 10,200 terms , organizations, projects and acronyms in the areas of information management, library science, publishing and archives management*. 10th ed. Aldershot: Ashgate.

Ratcliffe, R.A.S. 1984. Some aspect of weather forecasting for the RAF during the Second World War. *Weather* 39: 219-221.

Roxby, P.M. 1942. *China*. Oxford: Oxford Univ. Pre.

Steel, R.W. ed. 1987. *British geography 1918-1945*. Cambridge: Cambridge Univ. Pre.

Stoddart, D.R. [1988]. *A hundred years of geography at Cambridge*. [s.l.]: [s.n.]

Walford, A.J. ed. 1968. *Guide to reference material*. 2nd ed. Volume Ⅱ. [London]: Library Assoc.

Williams, M. 1995. Henry Clifford Darby 1909-1922. *Proceeding of theBritish Academy* 87: 289-306.

Willson, L.S. 1946. Some observations on wartime geography in England. *Geographical Review* 36: 597-612.